

退院支援における 相談支援事業所PSWの「かかわり」 ～長期入院精神障害者へのインタビュー調査から～

“Kakawari” of Psychiatric Social Workers in the Social Support Center for the Person with Disability during the Discharge Support: Analysis of Interviews with Long Term Hospitalized Psychiatric Patients

國重智宏
KUNISHIGE Tomohiro

要旨

本研究は、長期入院精神障害者の退院支援における相談支援事業所の精神医学ソーシャルワーカー (PSW) の「かかわり」を、3名の元長期入院精神障害者の体験的語りから明らかにし、次年度調査のインタビューガイドの作成を目的として実施した。ライフストーリー・インタビューにおけるテキストの解釈を参考に分析を行い、3つのカテゴリー、13の概念を抽出した。

分析の結果、長期入院精神障害者とPSWとの関係は、「人と人」としてのかかわりと「援助する者-される者」から成る関係が、場面毎に入れ替わり、どちらかの関係が前景に出てくる。しかし、一方の関係が完全に消える訳ではなく、後方に下がっているに過ぎず、この2つの関係を併せもつ関係であることが明らかとなった。

キーワード：精神医学ソーシャルワーカー かかわり 退院支援 長期入院精神障害者

Key words: Psychiatric Social Workers, Kakawari, Discharge support,
Long Term Hospitalized Psychiatric Patients

I. 研究目的

わが国では、精神科病院（以下、病院）に1年以上入院している長期入院精神障害者（以下、長期入院者）が約20万人（入院者の約3分の2）おり、うち年間1万人超の人が死亡により退院している（厚生労働省2014）。このような状況において長期入院を強いられた長期入院者の中には、退院を諦め、退院に意欲的でない人も少なくない。杉原の長期入院者に対する調査によると、長期入院者は、病棟内での専門職との乏しい関係性の影響により、退院や将来を諦め、自主性を奪われ、怖さと治療への不信、やることのない日々という状態に陥っていた。また、退院意思があったとしても、退院の見通しが不明なために入院に妥協せざるを得ない状況におかれていた（杉原2017：9）。

尾崎は、長期入院者から退院支援を拒否された事例を通して、夢や希望を抑圧し、徹底的に自己否定することでしか生きられなかった長期入院者に対して、援助者は、一方的に退院援助を行う「退院を可能にする救済者」という自らの幻想を否定することが必要であると述べている。そして、援助者も「安易な理解を拒む現実、どうすべきか分からないほどの現実に向き合うことがまずは不可欠である。」と指摘している（尾崎2002：19）。

長期入院者は、同じ空間にしながら、退院支援を行わない病院職員に対する信頼感を失い、退院への思いを語ることをやめ、望む人生を諦めることで生き抜いてきた。長期入院者の退院支援を担う者は、「退院したい」という想いを表出することさえできない状況におかれた彼らと向き合うと共に、そのような彼らを取り囲む困難な状況に向き合う。そして、彼らの諦めや不安を受けとめ、彼らが地域生活に「慣れていくまでの過程をていねいに伴走する」（白石2012：24）ことが求められるのである。

退院を諦めることで生き抜いてきた長期入院者が、再び退院に向けて動き出すためには、指定一般相談支援事業者（以下、相談支援事業所）において地域移行支援を担う精神医学ソーシャルワーカー（以下、PSW）との「かかわり」が重要になる。

本研究は、次年度実施予定の元長期入院者の語りからPSWの「かかわり」を明らかにする調査のプレ調査であり、次年度調査のインタビューガイドを作成することを主たる目的とする。

II. 研究の視点および方法

1. 用語の整理

本研究で明らかにしようとしているPSWの「かかわり」とは、クライアントである精神障害者との関係を、PSWの視点から表す用語のひとつである。精神障害者と「共にあること」「共に探ること」「共に歩むこと」など、クライアントと「共に」というPSWの姿勢を示す幅の広い概念である（公益社団法人日本精神保健福祉士協会2016：14）。

PSWがクライアントとの関係を「かかわり」と表現するようになったのは、PSWが所属機関や社会から求められる役割を遂行する中で、クライアントの人権を侵害したY問題¹以降である。PSWは、Y問題に直面する中で、クライアントとの「ここで、今」の「かかわり」を強く意識し、従来の「ワーカー・クライアント関係」ではなく、「かかわり」という用語を意識的に用いるようになった。

柏木昭は、PSWの「かかわり」を、クライアントとの「職業的關係」（柏木2007：2）であり、

「専門的關係」(柏木2010:105)であると認めた上で、その關係性について以下のように指摘した。PSWは、クライアントからできるだけ距離をおいて、客觀的に理解していくのではなく、クライアントと共にいて、彼らと共に見ていく(柏木2010)。そうした「かかわり」は、地域のトポスで行われるため、援助の終結と共に「スパッと切ることができない」關係である(柏木2010:69)。

谷中輝雄は、クライアントとの「かかわり」において「(PSWには)『問題に対処』するための『専門的能力』をあらわすことだけではなく、常に日常生活的なかかわりや、共同体の一員としてのかかわりが要求されてくることから生じてくる。問題解決で終了するものでもない。とすると、従来のワーカー・クライアント關係では説明しきれない部分がある。」(谷中1983:31)と述べ、「かかわり」を援助という目的が終了した後も続く關係であると指摘している。

柏木も谷中も、PSWの「かかわり」とは、①「援助」という目的が無くなった後も続く關係であり、②クライアントと「共に」いるということが大切にされる關係であると指摘している。

このようにPSWの「かかわり」は、援助という目的があって成立する「援助する者-される者」から成る關係だけでは説明できない、PSWの歴史的背景を踏まえて成立した多面的で多義的な概念であり、PSWが「精神障害者の社会的復権」という理念を具現化するためにクライアントと「共に」あることを示す態度であると考えられる。

2. 調査協力者

本調査は、A圏域の相談支援事業所に勤務するPSWの地域移行支援を利用して退院した元長期入院者3名を対象に半構造化インタビューを実施した。地域移行支援の利用者(入院期間1年以上)を調査対象とするのは、2012(平成24)年度より障害者自立支援法(現、障害者総合支援法)において、病院等からの退院支援が「地域移行支援」として個別給付化され、相談支援事業者の相談支援専門員が担当と規定されたからである。調査協力者は3名とも男性、年齢は20代~60代、今回の入院期間は1年~10年となっている。

3. 調査方法

調査は、初回インタビューを平成28年9月に、第2回を平成29年9月に実施した。インタビュー時間は、1人につき22分~58分であった。事前にインタビューガイドを作成し、それに基づき半構造化インタビューを実施した。インタビューは、調査協力者の自宅で行った。インタビュー内容は、地域移行支援を担ったPSWとの出会いから現在までの「かかわり」について自由に語っていただいた。インタビューは、調査協力者の許可を得て、ICレコーダーに録音した。

4. 分析方法

本研究では、長期入院者の主觀的な觀點から、PSWとの「かかわり」について意味づけることを目的としている。そのため、語り手の經驗的語りを大切にして、その主觀的世界に焦点をあてるライフストーリー・インタビューを参考に分析を行った。分析の手順は、ライフストーリー・インタビューにおけるテキストの解釈(金子2004;桜井2005;金子2007)を参考に、以下の手順でデータの分析を行った。

- ① 録音したインタビューデータから逐語記録を作成する。
- ② 調査協力者の語りを整理し、語られた話題にタイトルをつける。できる限り調査協力者の表現を用いてタイトルをつけ、コード化する。
- ③ データを時系列にして個別に整理する。
- ④ [出会い～退院に向けた支援→退院直前→退院後] という3つの時間軸で、3人分のデータを比較対照しながらコアになる概念やカテゴリーを明らかにする。

5. 倫理的配慮

インタビュー実施前に、調査対象者に対してインタビューに関する説明書と同意書を提示した上で説明を行い、書面にて調査協力への了解を得た。収集したデータ及び分析結果には細心の注意を払い、個人情報特定されないよう匿名化を徹底した。なお、本研究は東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科研究等倫理委員会による承認（承認番号H28-14S）を受け、実施している。

Ⅲ. 結果

3人の元長期入院者の語りを個別に整理し、表1で示した3つのストーリーを導き出した。その後、①出会い～退院に向けた支援、②退院直前、③退院後、という3つの時間軸で、3人分のデータを比較対照しながら、表2で示す3つのカテゴリー、13の概念を抽出した。以下、カテゴリーを【●●●】、概念を“●●●”、データを「●●●」でそれぞれ示す。

表1 3人の元長期入院者による語りの展開過程

Aさんのストーリー
①退院するつもり→②家族から突き放される→③退院を諦める→④自由になりたい→⑤黙っていたら退院できない→⑥何回も言う→⑦家族が同意しないと退院できない→⑧病院ワーカーに「退院したい」と伝える→⑨病院ワーカーから難しいと言われる→⑩医者ストップ→⑪絶対に退院を諦めない→⑫リハビリをがんばる→⑬自分で退院先を探す→⑭主治医変更→⑮主治医の退院許可→⑯病院ワーカーからの紹介→⑰挨拶に来た→⑱退院の相談に乗ってくれる→⑲いい人と思う→⑳何度も来てくれる→㉑住まいの紹介→㉒信用できる人→㉓住まいが見つかる→㉔生活できるか心配→㉕外出してみる→㉖家に行ってみる→㉗相談に乗ってくれる→㉘退院しても大丈夫→㉙引越しの手伝い→㉚感謝→㉛一緒に楽しむ→㉜困ったら助けてくれる→㉝いてくれる安心感
Bさんのストーリー
①ケアマネになるんだな→②いい人だな→③話を聴いてくれる→④誕生日祝ってくれた→⑤人間関係に疲れる→⑥助かった→⑦お見舞いに来てくれた→⑧保護室に入れられる→⑨退院したい→⑩退院できると言われる→⑪退院できるか不安→⑫退院したら働きたい→⑬一緒に夕食→⑭できてたことができなくなる→⑮助けてくれる→⑯やらせてくれる→⑰ほめてくれる→⑱愚痴をこぼせる→⑲相談できる→⑳頼れる→㉑これからも助けて欲しい
Cさんのストーリー
①一緒に働く→②一緒に飲んだ→③助けてくれた→④時々顔を合わせる→⑤制限される生活→⑥何もないから楽しい→⑦自衛隊よりまし→⑧息苦しい→⑨退院が急に決まる→⑩久々に会う→⑪立派になった→⑫いい人→⑬安心した→⑭心配が出てくる→⑮緊張する→⑯一緒に買い物に行く→⑰人づきあいに気を使う→⑱悲しい経験→⑲困りごと→⑳相談する→㉑家族と会えてうれしい→㉒家族と会えず、さびしい→㉓仲間がいる→㉔昔の仲間会える→㉕一緒に楽しみたい→㉖料理講座を開きたい

表2 長期入院者とPSWとの地域移行に向けたプロセス

	出会い～退院に向けた支援	退院直前	退院後
生きる上での困難	思いを尊重してもらえない 退院したい	不安や心配が高まる	生活のしづらさ
人と人としての 「かかわり」	思いを尊重してくれる 一緒に過ごす いい人		思いを尊重してくれる 一緒に楽しむ
専門職として 支援してくれる	病院に来てくれる 住まいを探す	退院に向けて手伝ってくれる	相談できる安心感

1. 出会い～退院に向けた支援

この時期は、3つの時期で最も多い7つの概念が抽出され、特に【人と人としてのかかわり】を示す概念が多く抽出された。このことから長期入院者は、地域移行支援の開始時には、具体的な支援よりも、PSWの間に「人と人」としての関係の形成を求めていることが示唆された。

(1) 退院したい

長期入院者は、「初めて入ってくる人はね、退院するつもりで、頑張ってるけども」というように、最初から長期入院するつもりではなく、入院期間が長くなるに連れて「ちょっと不安になってました」という語りに見られるように退院できるか不安になってくる。家族から「お前一生病院にいれ」と言われたり、主治医から「24時間ついて誰かがついていなかったら駄目だ」と言われたりする中で、徐々に退院への意欲を低下させ、「もう俺駄目かな」と諦めたり、入院者同士で「もう病院にいたほうがいいよ」と話したりするようになる。

このように長期入院者たちは、入院が長期化するにつれて不安や諦めを積み重ねていく。しかし、気持ちの奥底では、「いつか(退院できる時が)来るべ。」と思いつけており、一生入院したいとは思っていない。長期入院者たちは、「老人ホームでもなんでも良いつて言った。」「退院したいっていうのは言ってた。」というように“退院したい”という思いを、主治医や病院のPSWに伝えていた。しかし、病院においては、長期入院者たちの思いが優先されることはなく、治療者主導での入院治療が続いていた。

(2) 思いを尊重してもらえない

長期入院者たちは、病院の中で自分たちの思いを尊重してもらえないと感じていた。この概念の中で、最も多く語られた“思いを尊重してもらえない”と感じた場面は、“退院したい”という当たり前の思いを尊重してもらえないことであった。「なかなか先生は(退院を)良いつて言わないんですよ、いろいろなことを言っても、その時はほんとうにがっかりしちゃってね」というように退院が進まない状況について納得できない思いを募らせていた。

その他にも「1週間2,500円の小遣いを使って、煙草も吸えなかった。」「院内散歩行くとしたら、看護婦さん付きで、毎日1回ね、辛かったですね。」というように、病院のルールにも息苦しさを感じていた。

また、「散歩コースで鎖掛けられたんですよ。看護師さんに。で、ぶん殴ろうとしたら止められて、

それで鍵の掛かった部屋に入れられて」というように行動制限を経験したことにより、病院職員に対して自分の話は聴いてくれない、分かってもらえないという思いを積み重ねていたと考えられる。

(3) 思いを尊重してくれる

病院からの依頼で地域移行支援を担当するようになる相談支援事業所PSWは、“退院したい”という長期入院者の思いを尊重し、その思いを中心に据えて支援を行うことができる。

そのため、退院したい長期入院者たちにとっては「退院について考えた時に、ちょうど●さん(PSW)が相談に乗ってくれたんですよ。」というように自分たちの“思いを尊重してくれる”存在と感じていた。また、長期入院者たちは、退院後の住まいや働きたいという希望についても、その思いを否定せず、尊重してくれる相談支援事業所PSWの態度に感謝を示していた。

(4) 一緒に過ごす

長期入院者たちは、PSWとのかかわりで印象に残ったこととして、専門的な支援よりも、PSWと甘酒を飲んだことや誕生日を祝ってくれたことの方を挙げ、そのことを詳しく楽しそうに語っていた。長期入院者たちは、PSWが思っている以上に、PSWと一緒に過ごした楽しい経験を大切にしていた。

このことは、思いを尊重してもらえない息苦しい入院生活の中で、長期入院者が支援者に求めていることは、退院に向けた専門的な支援だけではなく、【人と人としてのかかわり】であることを示唆している。

(5) いい人

長期入院者から共通して、相談支援事業所のPSWに対して「いい人だな」「優しい人だな」「ああいい人だなと思って」と印象が語られていた。長期入院者たちは、病院職員と比較して相談支援事業所PSWに対して好意的な印象を抱いていた。

病院職員は、長期入院者が望まない強制的な医療行為をせざるを得ない立場であること、病院組織から「管理」という役割を担わされること、「治療する人・される人」という関係が固定化されていること等の理由により、「人と人」として彼らと接する機会を持ちにくい。

一方、PSWは、「人と人」として長期入院者と一緒に過ごす中で、彼らの思いを知り、その思いを中心に据えて地域移行支援を進めていく。そのため、長期入院者も支援を通じて「人」としてのPSWを知る。そうした協働のプロセスを通して、PSWのことを一人の人として“いい人”とを感じるようになる。

(6) 病院に来てくれる

不自由な入院生活の中で、治療者や家族から見放されたと感じつつも退院したいと思い続けてきた長期入院者たちにとり、退院支援のために来てくれるPSWは、その苦悩から助け出してくれる存在として認知される。そのため、彼らから共通してPSWが病院に来てくれることに対して感謝を示していた。

「何回も病院に来てくれて、去年、一昨年、一昨々年の夏場から冬場にかけてずっと何回も何回も説明してくれたり、どういうところだとか、こういうとこだとか、いろんなところを紹介してくれたんですね。」「(来てくれて) 助かったなと思った。」という発言からも、長期入院者にとって、外部から“病院に来てくれる”支援者は、長期入院から抜け出すための大きな存在であったことが確認される。

(7) 住まいを探す

長期入院者は、退院に向けたプロセスを共に歩むことを通してPSWに対する信頼感を醸成していた。長期入院者は、「この後、(長期入院にならず)退院できるかな」と不安になった時に外部から“病院に来てくれる”PSWに相談していた。

「ここ(グループホーム)見学に来るっていうの、どういうあれかなあとと思って」というように不安も抱きつつも、PSWと一緒に退院後の住まいを探していく。いくつかの住まいを見学し、「建物も良いし環境も良いしと思ってそれで選んだんですけど。」というように最終的な決断は長期入院者自身が行う。しかし、その決断に至るプロセスはPSWと共に歩んでいた。

2. 退院直前

この時期では、【人と人としてのかかわり】に関する概念のみが抽出されなかった。退院直前は不安や心配が高まる時期であり、長期入院者は、PSWに対して【人としてのかかわり】よりも、【専門職として支援してくれる】ことを求めていることが示唆された。

(1) 不安や心配が高まる

長期入院者は、退院が近づくにつれて、今後の生活への不安や心配も抱くようになる。長期入院者たちは、「どれぐらい歩けるかとか、バスに乗れるかとか」「書類とか、わかんない書類とか」というように地域で生活できるか心配になったり、「やっぱり社会人になる(退院して一人暮らしをすること)っていうのは、たいへんだなあと思いました。」と不安になったりする。中には「緊張して寝れない。」と語った人もいた。

退院直前は、長期入院者の“不安や心配が高まる”時期であるため、PSWは「人」としてよりも「支援者」として面を前面に出して、彼らへの支援を行う必要性が示唆された。

(2) 退院に向けて手伝ってくれる

上述のように退院直前は、長期入院者にとって、退院後の生活に関する“不安や心配が高まる”時期である。PSWは、支援者としての面を表に出して、退院に向けて彼らの不安や心配に具体的に対処することが必要である。

「ちょうど退院の日、兄貴来なかったんですよ、それでわざわざ●さん(PSW)が荷物運んでくれたんですよ。それは助かった。」「退院といっしょにテレビを買い、布団を買い、あと何か買ったかな。冷蔵庫買いに行って」というようにPSWたちは、具体的な支援を通して長期入院者たちの不安や心配に対応していた。

長期入院者は、そうしたPSWの支援に対して「そうですね、ありがたかったですね。」と感謝の念を示していた。こうした行為を伴う支援が、長期入院者のPSWに対する信頼感を高め、退院後の支援の継続へとつながっていくと考えられる。

3. 退院後

病院から退院して地域生活を始めると、人として様々な生活課題に直面する。そうした時に【専門職として支援してくれる】PSWがいてくれるという安心感が地域生活を継続する上で重要になる。

しかし、元長期入院者たちは、地域生活において常に支援を求めている訳ではない。そのため、普段は【人と人としてのかかわり】をPSWに求めていることが示唆された。

(1) 生活のしづらさ

退院後、元長期入院者は、地域生活での困難さに直面する。グループホームに入居した人は「隣近所と仲良くやっていかないと。喧嘩するわけにいかないし、やっぱり共同生活だから、どうしたらいいかなあと考えてるんですけど…」「朝2時頃目醒めても、テレビつけたって、隣近所に迷惑かけるし、どうしたらいいかと思って……ラジオをイヤホンで聞いて、なんかしてんだけど」と他の入居者に気を使わざるを得ない生活に苦労していた。元長期入院者たちは、他にも精神障害者保健福祉手帳の申請などのサービス利用の手続き、生活費のやりくり、身体疾患の治療、人間関係などに困難さを抱えていた。

(2) 思いを尊重してくれる

相談支援事業所のPSWたちは、元長期入院者たちの傍らにいつつも、自分たちと同じ地域住民である彼らの思いを尊重する。警察官になりたいと希望する人には、その思いを否定するのではなく、自分で警察官になるための方法を考えるように促していた。退院後にひとりで役所に行った人は、「『(役所に)よく行けたね』って (PSWが) 言ってたのは覚えてる。退院したばっかなのによく行けたねっていうのは覚えてる。」とPSWから褒められたことを嬉しそうに語っていた。元料理人の人は、将来「料理講座でもしてみたいなと思って。」と希望を語っていた。

A圏域の相談支援事業所PSWたちは、元長期入院者の希望を尊重し、その挑戦を見守ることを大切にしており、先回りして障害福祉サービスで彼らの生活を固めるようなことはしない。それにより、元長期入院者たちは、率直に自分の思いをPSWに語っていた。

(3) 一緒に楽しむ

元長期入院者たちは、PSWと共に楽しむ時間を大切にしていた。ある元長期入院者は、PSWとのかかわりで印象に残ったこととして、役所に行った時に「一緒に市役所の飯食ったこと」を挙げていた。

他の元長期長期入院者は、「それ(人づきあい)が無かったらちょっとやっぱりね、なんともただ暮らしているだけだから、飯食ってるだけだからね、なんか付き合いがないし、それじゃちょっと物足りない。」と語っていた。今回の調査協力者の中にも、長期入院やその他の事情により、他者との親

密な関係が断たれている人もいた。元長期入院者たちは、PSWが思っている以上に、他者との【人と人としてのかわり】を求めていると考えられた。

(4) 相談できる安心感

退院後には、友人や家族と自由に会えるなど生活の楽しみも増えるが、一方で既述のように“生活のしづらさ”も抱えることになる。そうした時に、相談できるPSWがいてくれることで、元長期入院者は安心を感じることができた。

「わかんない書類とか、あとはこの前は市役所に行く道を教えてくれて、一緒に行ってくれたりした。」「身体障害者の手帳を落としちゃって、身体障害者の手帳が無かったらバス代半額にならないんですよ。写真もないし、それで慌てて、●さん（PSW）と2人で写真を撮りに行って、再発行したんだ。」というように、元長期入院者に生活上の困りごとが生じた際は、PSWが手伝ってくれる。こうした経験を積み重ねる中で、彼らは「安心できますね。」という安心感をもち、一人暮らしをしても、一人で生きている訳ではないという感覚をもつ。困りごとが生じたとしても自分ひとりで抱え込まず、「いろんな人と相談するべきなんですね。」と考えるようになる。そして、「これから（課題が）出てくるから、それをサポートしてくれれば嬉しいなと思ってます。」というように、生活の主体は自分であり、必要に応じてPSWにサポートしてもらいたいと考えるようになる。

IV. 考察

1. 「人」としてのPSW

3人の元長期入院者は、相談支援事業所PSWに対する印象を「優しい人だな」「ああいい人だな」「いい人だな」と表現していた。彼らは、PSWに対して「いい職員」でも「いいワーカー」でもなく、「いい人」という表現している。この語りから、元長期入院者は、PSWの専門職としての面よりも、ひとりの「人」としての面を大切にしていたことが示唆された。

長期入院者は、入院生活の中で医療スタッフを中心とした専門職から“退院したい”という“思いを尊重してもらえない”経験を積み重ねてきた。そのため、彼らは、専門職に対する信頼感を失い、退院への意欲は持ち続けているものの、「長らく退院を希望しながら叶わなかった経験から、退院について考えることを止めてしまっている、やめたことにしている場合もあるだろう」（中越2016：56）という状態に陥っていると考えられる。

稲沢は、リッチモンドが友愛訪問員に対して貧しい人々やその家族に対して「真の友人」として接する必要性を指摘したことについて「彼女は、援助者が専門職化すればするほど、小手先の知識や技術ばかりが肥大化してしまい、人と人との関係であるという基本が忘れ去られていく危険性に気づいていたのではなかっただろうか。」と指摘している（稲沢2002：195）。病院では、専門職による専門知識に基づいた治療や支援が行われる中で、長期入院者と専門職の「人と人」としての関係が失われ、長期入院者は「治療される者」「管理される者」としての役割を担わされてきた。

長期入院者は、相談支援事業所PSWに対して「人」を見ることで、これまで心の奥底に押し込めてきた“退院したい”という思いを吐露できたと考える。退院への希望を語ることを止めてしまった

長期入院者の地域移行支援を担うPSWは、「人」として長期入院者とかかわる覚悟を何らかの形で彼らに伝え続けて行く必要があると思われる。

2. 入れ替わる関係

長期入院者から見たPSWとの関係は、出会い～退院に向けた支援の段階では、【人と人としてのかわり】の面が強い。退院直前になると、【専門職として支援してくれる】という面が前景に出てくる。退院後には、再び【人と人としてのかわり】の面が前景に出てきて、【専門職として支援してくれる】という部分は普段は見えてこなくなる。

このように退院支援における長期入院者とPSWとの関係は、常に固定的な「援助する者-される者」の関係ではなく、場面毎に「人と人」しての「かわり」と「援助する者-される者」から成る関係が入れ替わり、どちらかが前景に出る形で積み重ねられていく。一方の関係は完全に消える訳ではなく、後方に下がっているに過ぎない。長期入院者は、どちらかが完全に消え去ってしまうことを望んでいるのではなく、その2つの関係を併せもつ関係を望んでいると考えられる。

長期入院者は、退院直前のような“不安や心配が高まる”が高まる時期には、専門職としてのPSWの支援を望んでいるが、常に「援助される者」としての立場を望んでいる訳ではない。入院中は「援助される者」として、常に医療スタッフに管理される立場に置かれているため、ひとりの「人」として接して欲しいと感じる。また、地域生活に慣れてくれば、自分の思いを尊重してくれない過度な援助は迷惑である。望まない援助は迷惑であるが、一方で、「なんともただ暮らしているだけなら、飯食ってるだけだからね、なんか付き合いがないし、それじゃちょっと物足りない」ので、「人と人」としての「かわり」をPSWに求める。しかし、「いつでも困った時には一身に我が身に責任をひきうけるといった覚悟」(谷中1993:236)をもったPSWが傍らにいないければ、「安心できますね。」という気持ちにはならない。

長期入院者は、2つの関係から成る「かわり」を基盤に、自らが生活の主体として「これから(課題が)出てくるから、それをサポートしてくれれば嬉しいなと思ってます。」というように必要に応じてPSWの支援を受けながら、自分の生活を始めていく。

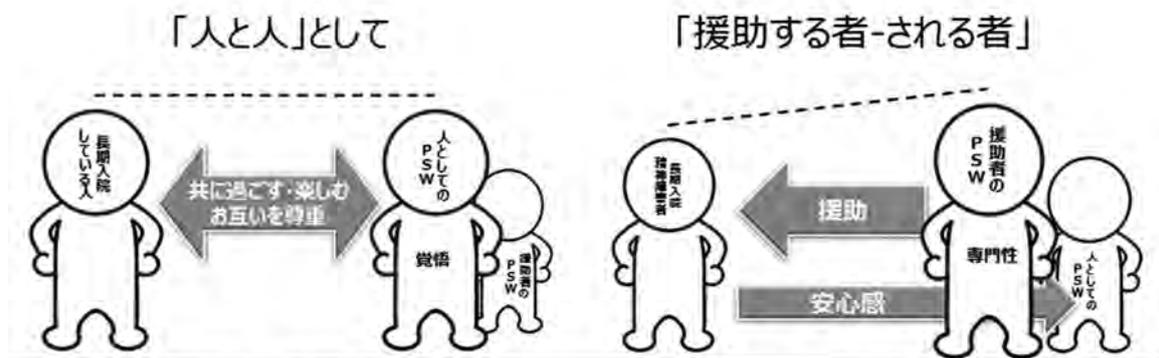


図1 「人と人」と「援助する者-される者」の違い

V. まとめ

長期入院者は、「人と人」として退院に向けて共に歩んでくれるPSWを求めている一方で、必要に応じて相談できる専門職を求めていることが示唆された。このように長期入院者とPSWとの関係は、場面毎に「人と人」としてのかかわりと「援助する者-される者」から成る関係が入れ替わりながら立ち現れてくる。また、どちらかが完全に消え去ってしまうのではなく、その2つの関係を併せもつ関係でもある。PSWは、歴史的な背景もあり、そうした関係を「かかわり」と呼んできた。そのため「かかわり」は、「『ワーカー-クライアント関係』が示唆するよりももっと人の営みの深みにおいて織り成す人間模様の一部終始に触れることによって、ようやく論じえるかもしれないという厄介な代物」（柏木2007：2）と表現される。

自らの思いを語ることを止めてしまった長期入院者が再び退院の希望を語り、退院に向けて歩み出すためには、この厄介な代物が必要不可欠なのである。長期入院者の地域移行支援を担うPSWには、「人と人」として彼らと「かかわり」続け、彼らのもとから「逃げださない覚悟」（稲沢2002：195）をもち、その覚悟を彼らに示すことが必要であると考えられる。

VI. 研究の限界と課題

本研究は、次年度調査に向けたプレ調査として実施した3事例のみの分析であり、理論的飽和化には至っておらず、その判断は修正可能性を残した結果である。

「かかわり」は、相互主体的な関係（柏木2010：104）であると言われている。そのため、次年度調査では本調査の結果をもとにインタビューガイドを作成し、長期入院者の経験的語りから、一方の主体である長期入院者の主観的「かかわり」を明らかにしていきたいと考えている。

謝辞

本調査にご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

文献

- 稲沢公一（2002）「援助者は友人たりうるのか－援助関係の非対称性－」古川孝順・岩崎晋也・稲沢公一・児島亜紀子著『援助すること』有斐閣, 135-208.
- 金子絵里乃（2004）「小児がんで子どもを失った母親の悲嘆のプロセスとその対応」『社会福祉学』44（3）, 43-59.
- 金子絵里乃（2007）「小児がんで子どもを失った母親の悲嘆過程」『社会福祉学』47（4）, 43-59.
- 柏木昭（2007）「誌上スーパービジョンとは何か」社団法人日本精神保健福祉士協会広報出版部出版企画委員会編『スーパービジョン』へるす出版, 1-4.
- 柏木昭・佐々木敏明（2010）『ソーシャルワーク協働の思想』へるす出版.
- 公益社団法人日本精神保健福祉士協会編（2016）『公益社団法人日本精神保健福祉士協会 生涯研修制度共通テキスト（第2版）』公益社団法人日本精神保健福祉士協会.
- 中越章乃（2016）「精神科病院における退院支援に関する文献的検討」『神奈川県立保健福祉大学誌』13（1）,

53-59.

尾崎新 (2002) 「葛藤・矛盾からの出発」尾崎新編『「現場」のちから』誠信書房, 1-23.

桜井厚他編 (2005) 『ライフヒストリー・インタビュー』せりか書房.

白石弘巳 (2012) 「当事者・家族にとっての『回復』との支援をめぐる」『精神科看護』39 (10), 20-29.

杉原努 (2016) 「精神科病院長期入院者の退院に至る変化に関する研究」『臨床心理学部研究報告』(9), 3-16.

谷中輝雄 (1983) 「精神障害者とのかわりから学んだこと」『ソーシャルワーク研究』8 (3), 25-31.

谷中輝雄 (1993) 『かわり』やどかり出版.

付記: 本研究は、文部科学省科学研究費 (課題番号: 16K04189) 助成を受け、実施した。

注

- ⁱ 1969年、Y氏の父親から母親への暴力やバットを振り回す行為についての相談を受けた精神衛生相談センターの精神衛生相談員 (PSW) が、本人に直接会うことなく、父親から聞いた状況のみでY氏を精神障害と判断した。その後、精神衛生相談センターから連絡を受けた保健所PSWが家族から拒否されたにもかかわらず、自宅を訪問した。最終的には、警官同行でPSWも含む保健所職員が訪問して強制的に精神病院に入院させた。第9回精神医学ソーシャル・ワーカー全国大会 (1973年) において、Y氏により、PSWの加害性に関する告発がなされ、PSWの実践が、クライアントの人権を侵害することがありうることについて問題提起された。